

シュティフター『晩夏』(6)

Adalbert Stifters "Nachsommer" (6)

鈴木善平

SUZUKI Zenpei

Heinrich begegnete Natalie zur Zeit der Rosenblüte bei Risach und Mathilde. Risach und Mathilde gingen wichtig mit ihren Rosen um und lebten einen Nachsommer. Risach besorgte die Begegnung.

Es trieb Heinrich zu Natalie und er hatte Liebesgefühl. Aber er weiß, daß man nicht sich solchem Gefühl hingeben darf. Die Begegnung führt zur Ehe und wahrscheinlich zu einem Nachsommer.

はじめに

この小論では、『晩夏』第1巻の最後の章第7章出会を取り上げる。ここに出会とは、ハインリヒとリーザハの若き日の恋人マティルデの娘ナターリエとの出会である。以下のように考察を進めたい。

1. 出会の場所について。その場所は、リーザハの薔薇の家と、マティルデの邸シュテルネンホーフとである。これはリーザハとマティルデの晩夏——晩年に訪れたもう一度の愛の幸福——の場所にほかならない。

2. 出会の時について。その時は薔薇の花の季節である。リーザハが薔薇を大切に栽培していることは、既に『晩夏』第1巻第5章において見たところである。マティルデもまた薔薇の花に特別な気持を寄せている。その薔薇の花の前でハインリヒとナターリエは出会った。

3. リーザハの配慮について。ハインリヒとナターリエの出会は、リーザハの配慮に支えられて実現した。

4. ハインリヒをナターリエに結びつけるものについて。彼の内に、ナターリエへと駆立てるものが働いた。

5. 結び。ハインリヒの分別について。彼の分別によって、出会は後に結婚に至る。晩夏にも至るであろう。

1 出会の場所について。

ハインリヒは、自然研究の旅の途中薔薇の家に立寄ったとき、薔薇の花の咲く頃また戻って来て暫く滞在することを約束した。こうして訪れた薔薇の家で薔薇の開花を待っているとき、マティルデとその娘のナターリエが薔薇の家を訪れて来る。毎年薔薇の花の季節に、花を見るために訪れるのである。薔薇の家には、ナターリエの弟のグスタフがリーザハの養子となって居る。

ハインリヒは、マティルデが薔薇の家で一家の主婦のように振舞うことに注目する。到着した日の最初の食事のとき既にそうであった。

「食卓の上席には、少し大きめな椅子があって、その前には皿が重ねてある。(略)家の主人は老婦人をこの椅子に導き、彼女はすぐ席についた。彼女の左に家の主人、右に私、主人の隣にナターリエ、その隣にグスタフがすわった。老婦人を主客として、皿のおいてある席につけたことが注意をひいた。この席は、私の両親の家では母がすわるところで、母はこの席から料理をわけるのである。この家でも

同じような手はずになっているに違いない。その通りで、老婦人は次々と皿にスープを入れ、給仕の若い女中がめいめいの席に運んだ。

これでとてつくろいだ気持ちになった。今までこういうことが欠けていたのだと感じた。家庭の雰囲気がこの家に入ってきたのだった。両親の家がいつも楽しくてころよいの、このような感じのためだった。」¹⁾

マティルデとナターリエの来訪は、薔薇の家の生活に変化を与えるものではなかった。二人は薔薇の家の生活に直ちに溶け込んでいる。二人は薔薇の家の家族そのものである。マティルデはこの家の主婦として家事に専念する。

「家の秩序は婦人たちの到着で妨げられることは全くなかった。ただ婦人たちへの配慮から調度などがととのえられただけである。(略)マティルデは女手のいる家政の仕事に加わって、息子や老主人の家庭的な幸福に関することになくなく気を配る。台所で女中たちの中に入って仕事をやる。また食料貯蔵室や地下室その他大切な場所へ足を運ぶ。召使いたちの食事や居室や衣服や寝室について配慮する。老主人や自分の息子の下着類や衣服やその他の持物をととのえ、修理が必要な場合はその指示をする。」¹⁾

夕食後よくハインリヒは、リーザハに誘われて、マティルデ、ナターリエ、グスタフたちといっしょに、戸外でのまどいのひとつを過ごしたが、そうしたときハインリヒには、リーザハとマティルデの二人は夫婦であるように思われたのである。

「家の主人は和やかな明るい態度で会話を導き、マティルデがそれにふさわしく答えた。(略)話が終わると老主人は星明かりの中を、あるいは、次第に輪郭をはっきりさせながら夕焼けの中に浮かぶ細い月の光の中を、マティルデの手をとり、丘をおりて家の方へと導き、子供たちのすなりとした姿がほの暗い繁みのそばを通っていく。

これらすべてが、さりげなく自然なので、この二人は夫婦であり、グスタフとナターリエはこの二人の子供のように思われた。そして私は、このように世間から離れたところで余生を静かに目立たぬように送っている二人を訪れた友人であるように思われるのだった。」¹⁾

薔薇の花の季節も終わる頃、マティルデとナターリエは帰っていく。そのあとハインリヒは、リーザ

ハヤグスタフといっしょに、マティルデの邸に招かれて行った。そして今度はここでリーザハが、一家の主人となるのを見るのである。

「薔薇の家では、マティルデが家庭で女がする仕事に気を配り、その方面のことにはすべて目を通して、色々直すべき点を指導していたが、シュテルネンホーフでは、薔薇の家の主人が領地のおもてむきの管理に関する事柄をすべて引受けていた。この方面ではマティルデより多くの経験をつんでいるようだった。家畜の健康やその世話に目を配り、農産物の倉庫や加工場を監督し、あらゆる場所に足を運んだ。このような二人の関係は、薔薇の家でも認められたが、ここではもっとはっきりしていた。彼の行動やマティルデと家政について交わす話のはしはしから、彼は大きな財産の管理を委ねられていて、全体を配慮しながら、負っている義務を熱心に細心に果たしているけれど、女性の仕事の領分には口出しをせず限界を守っていることがうかがわれた。このような態度はいかにも自然で、これ以外にはやりようがないという感じである。」¹⁾

ハインリヒは、この出会のときは、リーザハとマティルデの関係については何も知らない。この関係についてリーザハがハインリヒに語るの、のちになってハインリヒとナターリエが婚約してからである。そのときリーザハは、若き日のマティルデとの激しい愛と別れ、長い年月ののちの再会について語り、次のように言っている。

「男を女のところへ導く、火と燃える嵐のような愛の日々のあとに、静かで、まったく誠実で、甘美な友好関係として現れる、夫婦の愛というものがあります。(略)このようにして、私たちは幸福と安定の中にあって、いうなれば夏のなかった晩夏を送っているのです。」²⁾

先に挙げた幾つかの引用文から知られるように、リーザハとマティルデの二人は、ハインリヒの目には夫婦のように映ったのである。二人はリーザハのいう「晩夏」を生きていたのである。ハインリヒがナターリエと出会ったのは、このような「晩夏」の場所においてであった。

2. 出会の時について。

ハインリヒは約束した通り、薔薇の花の季節に薔薇の家を訪ねる。「薔薇の花はまだ開いてはいなか

シュティフター『晩夏』（6）

ったが、つぼみをいっぱいつけて、遠からず満開の花が期待されるところだった。」¹¹「薔薇はとてもよく生育した。幾千の薔薇が開花の瞬間を待っていた。私も花の世話を手伝った。」¹¹

こうして薔薇の開花を待っているある日の朝、一台の馬車が到着して、マティルデとナターリエが訪れた。毎年薔薇の花の季節に、花を見るために薔薇の家を訪れるのである。

「『今年はとてもよいときに見えたね、マティルデ』と家の主人が言った。『薔薇はまだ一つも開いていないが、もう皆花を開く用意ができています。』

（略）私たちは緑色の格子垣から外に出て、家の前の砂の広場に向かった。召使いたちはあらかじめ知っていたにちがいない。召使いが二人、ゆったりとしたひじ掛け椅子を運んできて薔薇の花の方に向けて少し距離をおいてすえた。

老婦人は椅子に掛けて両手をひざの上に置き、薔薇を眺めた。

私たちは彼女のまわりに立った、ナターリエは左側、その隣にグスタフ、家の主人は椅子のうしろ、そして私はナターリエにあまり近すぎないように、右側に少し離れて立っていた。

老婦人はしばらく椅子に掛けてから、黙ったまま立上がり、私たちはその場を立去った。」¹¹

マティルデは薔薇の家の家事に熱心に従事しながら、よく薔薇の花を見に行く。「このような仕事の間、ときどき、家の前の砂の広場に出て、壁に沿って葉をしげらせている薔薇を、何か憂いをおびた様子で眺めていることがあった。」¹¹

薔薇の花盛りになると、薔薇の前に家中の者が集まった。園丁や召使いや庭仕事をする人々もやって来た。そして、「薔薇の花は精細な批評を受けた。どの花が一番美しいか、どの花が気に入ったか、みんなで話し合った。（略）マティルデの話から、彼女がここにある薔薇についてはすべての種類によく通じているし、前の年と変わった点は些細な点にも気づいていることがわかった。特に好きな薔薇があるようだったが、どの花にも心からの愛情を示していた。私はこの日の様子で、薔薇の花がこの家にとってどんなに重要なものであるか推察したのであった。」¹¹

薔薇の家の薔薇の花は近隣に知れ渡っていて多くの人々が薔薇の花を見に来た。「しかし誰よりも薔薇の花を愛しているのはマティルデのようだった。

（略）もう以前から気がついてきたが、家の壁に咲いている薔薇の前に一人で立って、長い間花を眺めていた。椅子をもってきて、その上にあがり、枝を整えていることもあった。（略）時には、椅子の上に乗ったまま何もせず物思いにふけりながら、目の前に広がっている花を眺めていた。」¹¹

薔薇の花の時期の終る頃、マティルデとナターリエは薔薇の家を去った。別れの朝、マティルデは、リーザハにお礼の言葉を言おうとしたが、「眼から涙があふれた。白いやわらかなハンカチをとりだして眼にあてると、激しく泣きだした。家の主人は立ったまま、表情を変えなかったが、眼から涙がこぼれおちた。『道中、無事で、マティルデ』と彼はやっと言った。（略）二人はなおしばらくの間、手をとりあっていた。朝のそよ風がもう盛りをすぎた薔薇の花を、二ひら三ひら二人の足もとに吹きよせた。」¹¹

ハインリヒが前の年はじめて薔薇の家を訪れたとき、リーザハは彼に「薔薇を家の壁のところに植えたのは、若いときの思い出がこの花に結びついているからです」³¹と言った。出会の章では、ハインリヒはこの言葉について言及してはいない。しかし、リーザハが薔薇を大切に育てていることを見、マティルデが薔薇の花に対して特別な気持を抱いているらしい様子を見るにつけ、またこの二人があたかも夫婦であるかの如く、一家の主人としてまた主婦として行動しているのを見るにつけ、そして更に、二人の別れの悲しみを見るにつけても、リーザハの言った「薔薇の花と結びついた若いときの思い出」とは、リーザハがマティルデと共有する思い出であるに違いないとハインリヒには推察できたであろう。しかしハインリヒは、こういうことは尋ねようとはしなかった。

3. リーザハの配慮について。

ハインリヒとナターリエの出会の実現には、リーザハの配慮があった。リーザハの配慮は、ハインリヒが最初に薔薇の家を訪れたときに始まる。のちになって、ハインリヒとナターリエの結婚が決まったとき、リーザハはハインリヒに次のように打明けている。「あなたがはじめて私の家の格子の前に立っているのを見たとき、これはもしかするとナターリエの夫になる人かもしれないと思いました。」⁴¹

以来、ハインリヒに対するリーザハの配慮は、さまざまな形で示されるが、出会いの章では、ハインリヒが薔薇の家で歓迎されて、特別の人として扱われていること、またハインリヒのことをマティルデとナターリエにも話していること等がある。

マティルデたちが訪れたときの初対面の紹介の席で、「『あなたは招待されているのですよ』と家の主人が言った。『私どもの態度で、歓迎されているのがよくわかりでしょう。グスタフの母と姉もしばらくこの家に滞在します。私たちの生活がこれからどのように展開するか期待しましょう。』」¹¹⁾

マティルデもまたハインリヒを歓迎して言っている。「お仕事の暇がありましたら、この家の人たちが私どものところへ参りますときに、ごいっしょにお出かけくださいませ。心からおいでになるのをお待ちしております。」¹¹⁾

特別に扱われていることについて、ハインリヒは次のように言っている。薔薇の花が凋み始めた頃、「旅行者が二人訪ねてきて一晩泊り、翌日の午前中しばらく邸ですごしたことがあった。家の主人は庭や畑や農場を案内したが、自分の部屋や家具工房には案内しなかった。これで私がはじめてこの邸を訪れたとき、誰にでも与えられるとは限らない特別の待遇を受け、好意を示されたことがわかってうれしく思った。」¹¹⁾

リーザハがハインリヒのことを、マティルデ、ナターリエ母娘に告げているということは、ハインリヒとナターリエの出会いを準備する配慮の現れであると言えよう。

初対面の紹介の席ではまた、次のようなことが話されている。「『あなたのことは、前からうかがっております』と老婦人は私を再び黒い輝く眼で見ながら行った。『昨年ここへいらして、この春お訪ねになり、薔薇の花が咲くころこの家でしばらくおすごしになるとお約束になったことを聞きました。息子もよくおうわさしておりました。』」¹¹⁾

ハインリヒは去年はじめて薔薇の家を訪れ、二泊して出発したが、彼が出发したその日のうちに、リーザハはハインリヒのことをマティルデとナターリエに話しているのである。

マティルデの邸に向かう途中、「二頭の馬がゆっくりと坂道を上って行くとき、家の主人が言った。『去年ここでマティルデとナターリエにお会いになったのではありませんか。二人が薔薇の花を見に来

たとき、あなたが訪ねてこられて、ちょうどその朝ご出発になったことを話しますと、アリツの丘で徒歩の方にお目にかかったが、その方のようにと申しておりました。』

あの朝、ここで会った二人の婦人は本当にマティルデとナターリエだったのが、いま思いがけずはつきりした。(略) ナターリエをどこかで見たように感じたのはこのためだったのだ。(略) 私は家の主人にむかって、今のお言葉で思い出したのですが、この丘で確かにお二人に会って、車が坂をゆっくりと下りて行くあとを見送っていたのですと言った。『すぐそうだと思いますよ』と彼は答えた。

だが別なことに気がついて、顔を赤らめてしまった。彼は婦人たちに私について話し、その上、私の風体を詳しく説明したわけである。私に関心をもっていたのだった。それがとても嬉しかった。」¹¹⁾

このようにリーザハの配慮があって、言わば準備が行われた上で、ハインリヒとナターリエの出会いは実現した。但し、リーザハはナターリエには前以てハインリヒのことを話してあったが、ハインリヒにはナターリエのことを話してはいなかった。このことと、リーザハが、初めてハインリヒを見た時、これはナターリエの夫になる人かもしれないと思ったこととを考え併せると、リーザハにはまず第一に、ナターリエのために夫を選ぼうという配慮があり、その配慮が、ひいては出会いのための配慮ともなっているということになる。

4. ハインリヒをナターリエに結びつけるものについて。

ハインリヒをナターリエに結びつけるものとしては、まず、間接的なことではあるが、彼の薔薇の家に対する親しみが挙げられよう。

マティルデとナターリエの紹介の席で、ハインリヒは次のように挨拶をしている。「私は都会の間人ですが、よその方との交際があまりございませんので、おつきあいのすべを存じません。このお邸に参りましたのは、間違っって雷雨の来るのを怖れたためでしたが、とても御親切に迎えていただきました。また来るようにとお心をこめた招待を受けて、やって参りました。こちらではすぐ両親の家のように、くつろいだ気持ちになりました。両親の家でもこちらと同じように規律と秩序が支配しております。

もしお邪魔にならなければ、そしてほかの方々が好意をもってくださるならば、こんなことを申してよろしいのかわかりませんが、お招きを受ければいつでも喜んで参りたいと思っております。」¹¹

ハインリヒが、好意をもって迎えられ、特別の待遇を受けていることは、前述の通りである。

しかし、ハインリヒをナターリエに結びつけるもっと直接的なものがある。それが何であるかは、ハインリヒ自身にもわからない。すなわち、マティルデとナターリエが薔薇の家に到着したときのことをハインリヒは次のように語っているが、それによれば、彼は自分でも何故そうしたかわからないまま、また勿論ナターリエであることも知らないまま、ナターリエに会いに行ってしまうのである。

「ある日、部屋にいと、一台の馬車がこの邸の方向に登ってくる音が聞こえた。なぜこの馬車の到着するところを見ようとして下に降りていったのか、自分でもわからない。」¹¹

初めに老婦人が降り、あとからもう一人女の人が降りてきた。「まだ若い女性だった。（略）なんともいえないほど美しい人と思った。それ以上は考えられなかった。というのは、自分は格子垣の後ろに立っていて馬車から降りる人たちを見ているのに、迎えている人たちは私に背を向けていて、気がつかないのは、礼儀に反すると急に気づいたからである。私は家の角をまわって部屋に戻った。」¹¹

このあとハインリヒはずっと部屋に坐っていた。「本を読むか書きものをしようかと思ったが結局何もなかった。」 2、3時間後呼ばれて食堂へ行き、そこで紹介が行われた。昼食の食卓で、マティルデが主婦の務めをするのを見る。食後はめいめいの自由行動となった。ハインリヒは玄関に立ってナターリエとグスタフが庭に出ていくのを見送り、自分の部屋に戻った。ハインリヒはナターリエをどこかで見たように思ったが思い出せなかった。彼は午後ずっと部屋で過ごした。暑さが和らいだ頃散歩に誘われた。リーザハ、マティルデ、ナターリエ、グスタフと一緒にいる。夕食後庭に出てベンチに腰を掛けてまどいひときを過ごした。リーザハとマティルデは中央に掛け、リーザハの左側にハインリヒ、ナターリエとグスタフは母の右側に掛けた。暗くなって家に入り、それぞれの部屋に引きとった。こうして出会いの日は終わった。

「うら悲しい気持ちだった。麦わら帽子をテーブ

ルの上に置き、上着を脱いだ。開けてある窓から外を眺めた。この家ではじめて、窓から薔薇の格子越しに外の夜を眺めたときは違っていた。（略）

夜が随分更けてから窓を離れた。私は、毎晩、寝る前に神に（ zu meinem Schöpfer ）祈るのが習わしだが、この夜は簡素な小机の前にひざまづき、心をこめて熱烈な祈りを捧げ、あらゆることを、特に私の存在と私の運命および家族の運命を神の手にゆだねたのだった。」¹¹

あの馬車が来たとき、ナターリエが乗っていることを知らなかった。それなのに、馬車の到着するところを見ようとして下に降りていった。何故到着するところを見ようとして行ったのか、自分でもわからない。

ハインリヒは、この出会いの一日が終わった夜、自分とナターリエの結びつきをはっきりと意識して、自分の内に自分をナターリエへと駆りたてるものがあることを知った。こうして彼は、自分の存在と自分の運命および家族の運命を、自分の造り主である神の手に委ねたのである。

5. 結び。ハインリヒの分別。

ハインリヒは、馬車の到着を見に行っていたが、何故そういう行動に出たのか自分でもわからないのであった。その馬車にナターリエが乗っていることも知らなかった。何かがハインリヒを駆ってナターリエのもとへ赴かせたのであろう。

とはいえ、ハインリヒは控えめであった。薔薇の花の前に皆と一緒に立った時、「私はナターリエにあまり近すぎないように、右側に少し離れて立っていた。」¹¹ 薔薇の家に滞在している間、「ナターリエが私に話しかけることはごくまれにしかなかったから、人柄はまだあまりよく知らなかったし、また絵でも見るように観察する勇気がなかったから、立居振舞の判断もできない。（略）しかし、ナターリエの身边には、なにか深い幸福のようなものが広がっているのだった。」¹¹

マティルデとナターリエが薔薇の家を去った日、ハインリヒは物悲しいつらい感情に襲われる。彼は二人を見送ったあとしばらく部屋で過ごした。それから庭へ出た。畑や方々へ行ってみた。それから温室へ行った。園丁から園丁が得意とするサボテンの話が聞かされる。そして一つの分別を得た。

「人間は誰でも自分に関係のあることしか考えないで、それを他人にまで及ぼすものだとは私は考えた。この園丁はサボテンのことで頭がいっぱいになっていて、すべての人がこの植物に注意しなければならないと思っている。ところが、私は私で全く違ったことを考えているし、家の主人はまた自分の考えにしたがって努めているし、グスタフは勉学に専念している。だが園丁の話には取り柄もあった。彼と話しているうちに、憂愁の思い (*meine wehmütigen und schmerzlichen Gefühle*) が少しおさまった。このような感情におぼれてはいけないのであって (*wie wenig Berechtigung sie haben*)、これが世の中で唯一の最も大切なものなどと思ってはならないという確信がわいてきたのである。」¹⁾

ナターリエの去ったあと、ハインリヒは「物悲しいつらい感情」に襲われた。別れたあとの物悲しいつらい感情は、別れた人への慕情に他ならない。しかしハインリヒは、「この感情には少ししか正当性がない。これが世の中で唯一の最も大切なものと思はなければならない。」と確信する。この分別ある確信は、かつてマティルデの母が、若きリーザハを諭した言葉の延長線上にある。昔、リーザハとマティルデは激しく愛しあったが、まだ若すぎるという理由で、マティルデの両親によって仲を裂かれた。そのときマティルデの母は次のように言って若きリーザハを諭したのである。

「(マティルデが) まず何よりも将来の生活のために一番大切な準備をしなければならない時期に、このような感情にすっかり捉えられているのを、そのままにしておいてよろしいのでしょうか。」⁵⁾ また、「永続的な家庭を樹立するためには、必要なことが二つあります。堅実な生活を営み、社会的に独立することですが、あなたはそれまでに長い時をかける必要はありません。その努力の中に、早すぎる愛情を持ちこむのは考えものです。あなたを支配している愛情の中に、あなたの本質と心を危険にさらすものがあるのではありませんか。」⁶⁾

ハインリヒは分別ある確信に従い、リーザハをはじめとする人々の配慮を受けつつ、マティルデの母の言葉にかなう修行の道を歩いてのち、ナターリエと結婚する。『晩夏』の物語は、ハインリヒとナターリエの結婚で終わるが、もしこの二人が共に老年を迎えることができるならば、リーザハとマティルデと同様に、「晩夏」の時を迎える筈である。

テキスト

Eben, K. und Müller, F.: Adalbert Stifter Sämtliche Werke VI und VIII-1, Gerstenberg Hildesheim, 1972.

以下 S W VI, VIII と略記する。

藤村 宏: シュティフター晩夏、集英社、東京、1986. 引用した訳文はこの書による。但し必要に応じて逐語訳させていただいた。

注

第1巻第7章出会 *Die Begegnung* からの引用文は、多数なので、すべて 1) とする。

- 1) S W VI. *Die Begegnung*
- 2) S W VIII-1. S. 172.
- 3) S W VI. S. 156.
- 4) S W VIII-1. S. 173.
- 5) ebd. S. 143.
- 6) ebd. S. 146.